
羅刹王子と菓子屋の娘

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羅刹王子と菓子屋の娘

【Nコード】

N3656G

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

悪逆無道の羅刹王子は、ある夜、甘い香りに誘われて一軒の菓子屋に入りました……。プロットは童話のつもりで書きました。

銀糸を編んだすだれのような雨が、黒い空からしずしずと垂れて
おりました。

今は朝なのか昼なのか、ともすると夕暮れ時なのか見当もつきません。それほど空は暗く、また戦火にさいなまれた街並みもよりいっそう暗く翳っております。通りに人影はありません。ただ冷たい水を張った石畳がまるで青銅の鏡のように煙って、黒死病に冒された半死人のようにやつれてしまった街並みを逆さまに映し出しているのです。

そんなモノクロームの景色にあって、ただ一点、炎に包まれたお城だけが赤々と風になぶられておりました。

ああ、それはなんとという不吉な光景でしょう。

きな臭い黒煙と火の粉は登々と天を衝き、その周りをつむじ風のように渦巻きながら死臭を嗅ぎつけた伽那久羅虫かなくらむしの群がぶんぶん羽音を立て飛び回っているではありませんか……。

こんな小さな国を攻め滅ぼし、王さまの首を切り、お城に火を放った悪逆無道の輩はいったい誰なのでしょう……。

後に、幸運にも生き残った一人の媼おうなが、伽のつれづれに孫たちへ語って聞かせたところによりますと、戯れ半分にこの国へ軍隊を差し向け、まるで赤子の手をねじるように滅ぼしてしまったのは、ランカー島に住む羅刹の王子だそうでございます。名をメーガナーダインドラといっって、後に雷帝を倒したことを誇りインドラジットと名乗っております。

彼は、一見して身分賤しからぬ風格を漂わせる紅顔の美少年でございました。しかし緑柱石のようなその瞳の奥には、常に倨傲と憎悪の炎が赤々と揺らめいていたのでございます。

ランカー島にある彼の後宮には、大陸のあらゆる国からさらってきた美姫が伽羅女きやらめとして囲われておりました。それはそれは、美し

い娘たちです。しかしインドラジット王子は、いかなる美姫にも心を動かされることはございませんでした。娘たちを見る彼の目は、あたかも珍しい蝶の標本を集める冷腸無垢な子供のようにございます。

王子は、愛を知りませんでした……………。

劇場の舞台が暗転するように、この壊れた街にも沈々と夜の帷が下ります。

先刻まで真っ黒く空を覆っていた鬱陶い雨雲は、どうやら天にまがっくうてんしす月宮天子が追い払ったようでした。しかし密やかな月明かりの下、無表情に薨を連ねる街並みはまるで墓場のよう。家々はその営みの火を隠すように門扉を閉ざし、中に暮らす人々は老若男女みなひっそりと息をひそめております。あとはただ焼け残った牧畑の陰で、人の世の無常を嘆く虫たちの聲だけが鬼哭啾々と闇を震わせているのでございました……。

さて、インドラジット王子、焼け落ちたお城の堀ばたに伽舟などを浮かべ、その楼にふんぞり返って美女たちに酌をさせておりましたが、不意になんだかつまらなくなり、酔いにまかせてぶらりと舟を降りました。

ふり仰げば、金鏡のごとく月が中天に照り輝いております。

そんな良夜に誘われ、人気のない石畳のだらだら坂を彷徨っておりますと、追剥でしうか、不穏な空気をただよわせる黒い人影があつちにちらり、こつちにちらりと見え隠れするではございませんか。悪貨は良貨を駆逐するの言葉どおり、安寧秩序の紊乱はどうやら世に悪人どもをはびこらせてしまったようです。

ひたひたひたひたと闇に紛れ、それらの人影がインドラジット王子を取り囲みます。

「これは身なりの良い童男かな、このような寂しい場所をえらんで夜行するとは、さては追剥が原へ螢狩りというやつか」

薄笑いを浮かべた長身白皙の男が手にダガーナイフをひらひらさ

せて凄みますが、元よりインドラジット王子に怖いものなどあるう
はずもございません。男の襟首を締め上げ赤舌神のごとく睨み据え
ますと、

「悪人こそ往生するにふさわしいと古い釈迦文にもあるが、どれ、
ひとつこの羅刹王子がお前たちに引導を渡してくれよう」

と凄みを利かせて宣います。たちまち男達は齒の根も合わなくな
り、こけつ転ろびつ闇の彼方へ逃げ散って行ったのでございました。
「やれやれ、あのような賊匪の浅ましい姿を目にするにつけ私はだ
んだん気が滅入ってしまう、あれじゃあ、まるで水の面に映る己の
姿を見るようではないか……」

そうつぶやくとインドラジット王子は、足どりの重く元来た道
をとぼとぼと引き返してゆくのでございました。

ふと……、

何やら香ばしい匂いが立ちこめて王子の足を止めます。甘く、優
しく、吸い込むと肺の中でふわっと蓮華の花のようにひろがる、え
も言われぬ心地良い香りでございます。

辺りは月夜……、沸き上がるような蛙鳴に沈む暗碧とした水路に
は、古びた石造りの小橋が心細く架かっておりました。良い匂いが
ただよってきたのは、ちょうど王子がその橋を渡り終えたときのこ
とでございます。

目の前にはこの街の目抜き通りが広がっております。戦火に苛
まれる以前は、市が立ち、店がならび、人が溢れ、それはもう邯鄲
の都と変わらぬくらいに賑わっておりましたが、今は荒涼として見
る影もございません。

王子は、殺風景な景色には場違いなその甘い匂いを不審に思い、
注意深く辺りをうかがいました。

「はて——？ 月色皎々としている他は、店を営む明かりとて見え
ぬようだが……」

しかし王子は、とうとう見つけてしまいました。

寂寥とした廃墟を連ねる街並みにただ一軒、仄明かりの灯る小さなお店を……。

「おお、あれに見ゆるは菓子屋ではないか」

実はインドラジット王子、甘いものには目がなかったのでございます。

浮かれ浮かれて夢助のごとく、王子はその店に近づいてゆきます。看板には、こう書かれておりました。

——ウルヴァシーの菓子屋

「……うむ、よい名だ」

滅茶苦茶に壊された店内に一步足を踏み入れますと、割れたガラスがしゃりつと音を立てます。すると店の奥にございます明かりの灯った部屋から声が聞こえてまいりました。

「いらっしやいませ、少々お待ち下さいな」

まるで歌うような娘の声です。しかし待てと言われて大人しく待つようなインドラジット王子ではございません。遠慮会釈もなく店の奥へずかずかと上がり込んでゆきますと、あの甘い菓子の芳香がいよいよ強くなり王子はくらくと目眩を感じてしまいました。そして自分が極楽安養浄土の蓮華台にでもいるような陶然たる心持ちになって、うっとりするのでございました。

奥の部屋は、菓子の工房になっておりました。

そこにエプロン姿の娘が一人、火にかけた鍋の中身を木べらでかき混ぜながら鼻歌をうたっておりまして。その娘は王子が声をかける前にふり向き、そしてにっこりと微笑んだのでございます。

「ごめんなさいな、いま手が放せないのよ」

ああ、その笑顔のなんと可愛らしいことでしょう。

まるで濡れた烏羽みたいに黒く青みのあるつややかな髪はふわっと肩にたれ、慈悲ぶかく聡明な印象をあたえる黒目がちの瞳や、牙彫りの聖母マリア像を思わせる紅玉の肌、そして大輪の貌佳草かおよくさと白梅の花弁にも似た朱唇皓齒しゅしんこうしの美しさといったら、もうこの世のものとは思えません。

しかしインドラジット王子の興味は、もっぱら鍋の中にのみあるようでした。王子は訊ねます。

「おい娘、お前は今いったい何を作っているのだ？」

「アルザスエースよ」

あの歌うような声で娘が答えます。王子は伸び上がって鍋の中を覗き込みました。

「アルザスエースとは、どのような菓子だ？」

「あら……」

娘は可笑しそうに顔をほころばせ、口に手を当てて微笑みます。それはこの見知らぬ少年が、自分の作る菓子にもうすっかり夢中になっているのが見て取れるからでございます。娘は上機嫌で、そして例の歌うような調子で菓子の説明をはじめました。

「アルザスエースは、正方形に切り分けたパイの生地、フランボワーズペパンとアーモンドヌガーを3層に重ねたお菓子ですよ。ほら、もっと近くへ来てよくご覧なさいな。私がいま鍋で溶かし、バターを混ぜたものにアーモンドスライスをからめて作るのですよ」

王子はふらふらと、まるで磁石に引き寄せられるブリキのおもちやみたい、ぎこちない動作で娘に近づいてゆきます。そして、うっとり娘の手元に見入るのでございました。やがて娘が火を止め、湯気と甘い芳香の立ち上るアーモンドヌガーを天板の上に平たく延ばし、それを波刃のナイフで正方形に切り分けはじめますと王子はもうたまらなくなり、憑かれたような声で言ったのでございます。

「わ、私にもその菓子作りというやつを、させてはもらえぬか」

ここで初めて娘は、この見知らぬ美少年に疑問を抱きました。

「あの……、あなたはいったい誰なの？」

そう言っ、て娘は小首を傾げます。王子は考えました。もし自分がこの国を滅ぼした羅刹の王子だと知れたら、娘はきつとここから逃げ出してしまふにちがいない。それならばいっそ強引に城へ連れ帰って、そこで無理やり菓子作りをさせてみようか？ いやいや、き

つとそんな事したら、この娘は心を閉ざしてしまうだろう。今ここで、この娘が機嫌良く作った菓子でなければ美味しいはずはないのだ。

インドラジット王子は何故だかそう確信し、そして嘘をつきました。

「私は……、その、言ってみれば天竺浪人てんじくろうにんというやつだ」

「まあ……」

娘は目を睜り、そしてもう一度可笑しそうにくすつと笑いました。わずかに開いた唇の間から真っ白い糸切り歯が覗いております。やがて娘は言いました。

「じゃあ、裏の井戸で手を洗ってきて下さいな」

王子は言われたとおり裏庭へ行き、ポンプを押して溢れ出る井戸水で手を洗いながら、自分が今、とてもわくわくしている事に気づき、そして驚いたのでございます。

「不思議だな……」

彼はこれまでの人生で、心がわくわくした事など一度もございませんでした。

つねに生命衝動リビドーの命ずるがまま、それはもう好き勝手に暴れ回っておりましたが、なぜか心の中は虚しさでいっぱいだったのでございます。

でも今はどうでしょう、ただ菓子を作るといふそれだけの事で、心がこんなにときめいているではございませんか。

「ああ、今宵はなんと美しい月夜だ……」

王子は、銀盤のように丸い月を見上げ、そして生まれて初めて心の底から笑ったのでございました。

工房に戻ると、娘は洋なしの皮を剥いておりました。王子はさっそく興味津々に訊ねます。

「今度は何を作るのだ？」

すると娘は、またあの歌うような声で答えました。

「ボン・スーヴニールよ。秋の思い出という意味のお菓子なの」

そして優しく王子を見つめ、手招きしてうながしますのでございます。
「さあ、早くこっちへいらっしゃいな、そして私の教えるとおりにやってごらんなさい」

王子は言われるままフライパンに火を掛け、そしてその上で溶けたバターとバニラの種に絡めながら洋なしを転がし始めました。慣れぬ手つきで悪戦苦闘していた王子も、次第に堂に入ったへら捌きを見せるようになります。やがて黄金色になった洋なしにココアパウダーを振りかけると、バニラの香りと相まってとろけるような甘い匂いが王子の鼻をくすぐるのでございます。そのまま皿に盛って仕上げるに黒こしょうを散らしセルフイユの葉をかざると、美味しそうなボン・スーヴニールの出来上がりです。

「まあ、お上手。私が作るよりずっと美味しそうに出来たわ」

娘は、王子と皿を交互に見くらべながら眩しそうに目を細めました。今まで破壊することの喜びしか知らなかったインドラジット王子が、初めて創造する喜びを知った瞬間でございました。王子はその場にひざまずき、その皿を娘に捧げてこう言ったのでございます。
「これは私が生まれて初めて作った菓子です。ぜひともあなたに召し上がっていただきたい」

「まあ、私に……？」

娘は雪肌の頬をほんのりと紅く染め、やがて言いました。

「じゃあ一緒に食べましょう」

二人は向かい合って一つの皿をつつき合います。王子は、このとき初めて娘の美しさに気がついたのでございました。城の後宮に閉じこめてある娘たちよりも、この娘はずっと美しい。何故だろう？

それは表情が生き生きしているからだ。美しいものが美しくあるためには、野に放ってやらねばならぬのだ。王子はやっとその事に気が付いたのでございます。そして城に戻ったら、後宮の娘たちを残らず家に帰してしまおうと心に決めたのでございました。

「そうだわ、あなたなら、あれが上手に作れるかしら」

不意に娘が言いました。あれとは何だと王子が訊ねますと、ヴィエノワという素朴な焼き菓子だと言って娘は淋しそうに微笑んだのでございます。

「昔、母がよく焼いてくれたのだけれど、でも私とその菓子の焼き方を教わる前に、母は死んでしまったの。後になって本などで色々調べてみたけど、どうしても母が焼いてくれたような味にはならなくって……」

面白い、と王子は思い、さっそくそのヴィエノワという菓子を焼いてみることにしたのでございます。

「まずはバターを泡立てて下さいな。そしてその中にバニラの種とお砂糖を入れ、色が変わるまでかき混ぜるのよ」

娘の説明に従って王子が材料を攪拌します。

「……次に卵を加え、薄力粉と一緒に再びよく混ぜます」

「かつて韋陀ヴェーダの神々も、乳海を攪拌することによって至高の宝を得たというが、さて私には一体どんな菓子が作れるのか……」

王子は、菓子が出来上がるのが楽しみで仕方ありません。まるで楽変化らくへんげん天にいるような心持ちでございます。

「ああ、何かを作り上げると言うことは、なんと楽しいことか」

ところが暫くするうちに、楽しみ極まりて哀情多しとも言います。王子は次第に悲しい気持ちになってしまったのでございます。

そう、インドラジット王子は創造する喜びを知ると同時に、破壊することの罪を知ってしまったのでございました。

「……思えば、私は今までなんと罪深い所業をかさねてきた事であろう。娘を攫い、人を殺し、街を焼き、まるで悪逆の仏弟子、六群比丘ろくぐんひきくのようではないか。ああ、私も最期にはあの迦留陀夷かるだいのように、切り落とされた首を糞壺の中に沈められるのであろうか……」

そう言って、さめざめと泣くのでございました。娘は、このとき王子の正体に気づき大層驚きましたが、しかしこうして一心に罪を

悔いている王子の姿を見ておりますと、何とかして慰めてあげたいという気持ちになるのでございました。

娘は決して賢女立てせず、しかし切々と訴えました。

「確かにあなたはたくさん罪を犯しましたわ。でも鬼神に邪よこしまなしと申しまして、その心は純粹無垢でございますもの。今あなたが本当に罪を悔いていらっしゃるのでしたら転凡入聖てんぽんにっしょう、きっと高德な王子へと生まれ変わる事ができましょう」

「……そうであろうか？」

「ええ、悪に強いは善にも強いと申しますし、それに美味しいお菓子を作る人に悪い人はおりませんもの」

王子は娘の手を取り、そしてこう言ったのでございます。

「私はこれより故郷の城へ立ち帰り、そして過去の罪をつぐなうからまたここへ戻って来る。どうかその時もう一度、私に菓子作りを教えて欲しい」

「ええ、いつまでも……、ずっとお待ちしておりますわ」

ありがとうございますって、王子は颯爽と夜の街へ飛び出していったのでございます。

娘は、しばらく何事かを考えておりましたが、不意に王子が作りかけのまま残していったお菓子の生地を、焼いてみようと思い立ちました。

「まあ……」

焼き上がった菓子をひとくち食べて、娘は驚きました。

「これよ、これだわ。これこそが私の探し求めていたお母さまの味よ……」

娘は、その鈴を張ったような瞳に涙を浮かべながら、しかし可笑しそうに微笑みました。

「ふふふ……、そうなのね。お塩が足りなかったんだわ」

焼き上がったヴィエノワには、たつぷりと王子の涙が含まれていたのでございました。

羅刹王子と菓子屋の娘……完

（後書き）

お読み下さり、ありがとうございました。――ボクは酒飲みですが、甘い物も大好物です。世間では、そういう人を”盗人上戸”ぬすびとじょうこと呼ぶのだそうです。やな呼び名だなあ……（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3656g/>

羅刹王子と菓子屋の娘

2010年10月8日15時15分発行